



機那サフラン酒本舗は パワースポットです

2021年11月6日改訂 春日

MfG_J_Yakushi_Nyorai_and_attributes.ppt
(前 MfG_J_サフラン酒本舗のパワースポット)

サフラン酒の屋敷には、いろいろな見方、受け取り方があります。
金持ちの、キンピカ趣味と云う人もいます。

でも、それだと、1/10も楽しめないように思います。
本当は凄い仕掛けなんではないか、という気持ちで見ると、100倍、楽しめます。

とんでもない解釈をするかも知れませんが、今日は、
パワースポットという見方で、お話します。

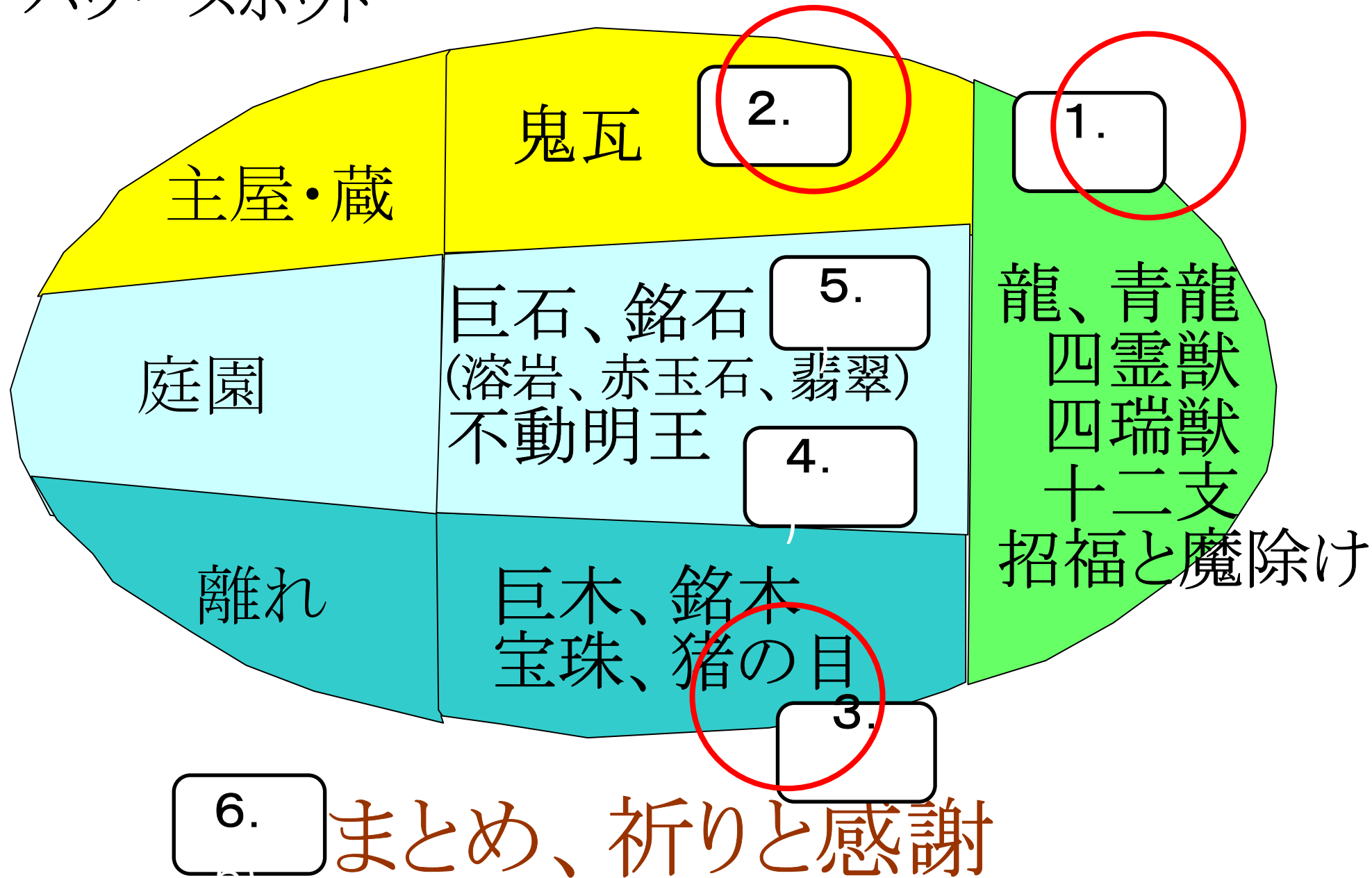
パワースポットの源は

{ 自然のエネルギー、生命力への畏敬
人間の大きいなる営みへの敬意
神仏への祈り、報恩感謝
魔除けへの祈り、感謝

機那サフラン酒で、それは具体的には

{ 根本は、生涯の仕事と定めた薬種への誓い
～薬師如来の守護神、一對の龍への祈り
ありとあらゆる守護神、招福と魔除け
祈りと感謝

際限なく埋め尽くす、機那サフラン酒の
パワースポット



1. まず龍、鯉を探すと・・・

鬼瓦の二頭づつの龍、

更に滝登りの鯉も龍。

とにかく、多いことに、お気づきと思います。

	龍	鯉
鏝絵蔵の軒下	○	
鏝絵蔵の東面の鬼瓦	○	
衣装蔵	○	○
庭園	○	(○)
接待用別邸(離れ)	○	
鏝絵蔵コレクション室	○	○

近代建築史の藤森先生は、30年以上前に
訪問されて、数えておられました

龍が38 鬼瓦の建物8棟として $8*2*2 = 32$

その他、池の噴水、離れの屏風・・・

鯉が10 衣裳蔵に二匹、コレクションの鯉仙人、

その他、池に大きな鯉・・・

ポイントは二男の仁太郎さんの青年期の身の上

吉澤家の次男として、南の隣村、定明村で誕生。
5才で摂田屋村にある母の実家・薬屋の養子となり、
17才で千手町の薬種問屋商に奉公に出たこと。
21才でサフラン酒の製造を開始し、
28才で養子縁組を解消し、実家に復帰。
31才のとき、定明から摂田屋に移転、本格的に事業開始。

元々、家業の薬酒造りを継ぐことになっていたのでしょうか。
仁太郎も、幼い時期に、生涯の仕事薬種、薬酒に関わる
覚悟を決め、薬師如来を頼ることになったのでは。

その薬師如来を守護する龍を、頼みとすることになったと
考えると・・・。

私は、これこそが「隠れた主題」と思いたいのですが、...



薬師如来と宝珠



登り龍と下り龍を随える薬師如来

登り龍は、浄土にある「悟り、幸せ」の宝珠を求め、
懸命に修行する菩薩の姿、

下り龍は、求めていた宝珠を得て、
地上のありとあらゆる生命を救済するため、
地上に戻る菩薩の姿。

ここでは、龍も、怖いもの、恐れの対象から、
守護神へと変化しています。

サフラン酒の明治24年、特許局への商標登録にも、この双龍が使われています。

ただし説明書きには、「玉を争う図」とあり、守護神とは言っていません。





村松・医王山円融寺の本堂欄間
龍の彫刻（江戸末期の作）



機那サフラン酒 吉澤家 仏間の欄間
双龍の彫刻

仁太郎が伊吉を連れ、再三訪れた魚沼・西福寺の「道元禅師猛虎調伏の図」は前住職の志を大龍和尚が、発願し、形にしたもの。

「この雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所となるお堂を建てたい」

「人々の心を豊かで幸せに導いて下さるお釈迦様や道元様の教えの世界を再現したい」

サフランの罌絵や龍も、吉澤仁太郎が、同じ気持ちから作成したもの。この「人々の心の拠り所」も、パワースポットの条件のひとつ。

2. 次は、魔除けの鬼瓦

起源はメドゥーサ（中東、ギリシャ文明）
ギリシャ・ローマ文明から中東の王国に
引き継がれ、さらにインド、中国を経て
日本へ辿りつき、それが鬼瓦になった。
(日本)

鬼瓦に巻き付く龍も、登場

メドゥーサ (Medusa)

邪気をはらい侵入者を防ぐ怪物

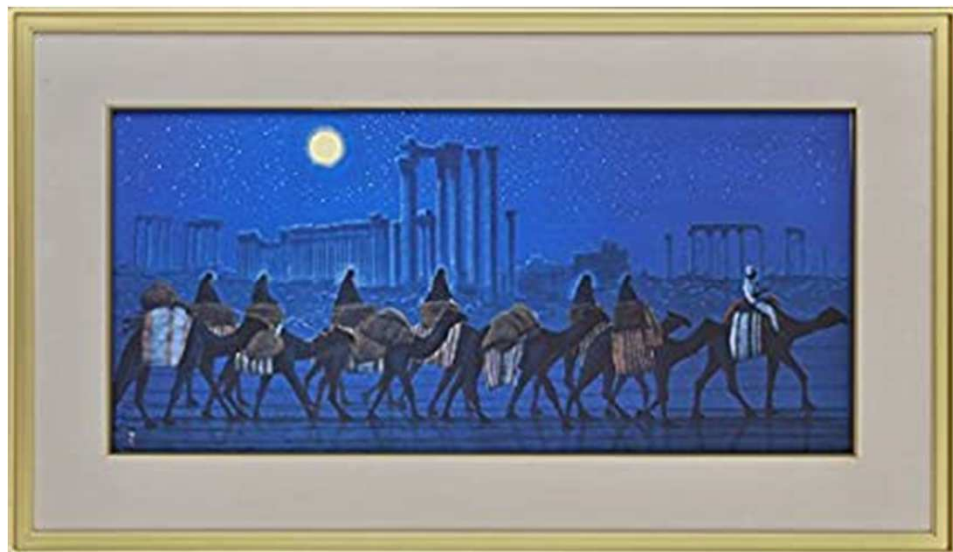


570 B.C.

蛇を巻いた髪、大きな耳.

メドゥーサ

紀元三世紀ころに滅んだ隊商都市パルミラの地下墓の入り口に、飾りとして存在するとのこと



紀元前1世紀～3世紀のパルミラ

「パルミラ遺跡 夜、朝」 平山郁夫さんの大作

ナーガ

インド神話に起源を持つ、蛇の精霊、蛇神のこと。

元来コブラを神格化した蛇神であったはずだが、コブラの存在しない中国では漢訳経典において「竜」と翻訳され、中国に元来からあった龍信仰と習合し、日本にもその形式で伝わっている。

みずち(蛟)

日本の神話・伝説で水と関係があるとみなされる。

竜類か伝説上の蛇類または水神。

龍、魔除けの見直し

※メドゥーサ	ギリシャ、中東の神話に起源を持つ、邪気をはらい侵入者を防ぐ怪物。
※ナーガ	インド神話に起源を持つ、蛇の精霊。コブラのいない中国では漢訳経典において「竜」と翻訳。
※みずち(蛟)	日本の神話・伝説の水神。
※龍	恐れの対象から守護神へと変容
※猪の目	恐ろしいものから「魔除け」に変容

日本で、恐ろしいものから、
魔除け、守護神へと役目を
変えた



鬼瓦に巻き付く龍

清水寺三重塔 創建は 平安初期(841)

龍は雨を呼び 火を防ぐ守護神
鬼瓦の厄除けと合体したと
みることができる



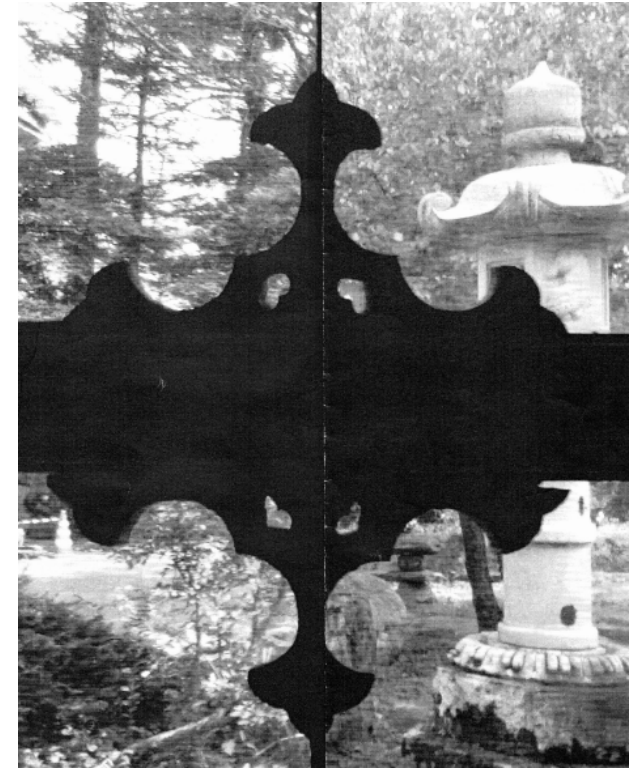
サフラン酒
主屋の鬼瓦



3. 猪の目

農耕の始まった縄文時代、人々が栽培した食物を食い荒らすイノシシを恐れた。

猪の目も、恐ろしいものの代名詞から、逆の「魔除け」に変容したと考えられる。



(編集しています)

サフラン酒の離れ、猪の目

離れの一階、二階、
合わせて1,500個の
イノシシの目が睨んでいます

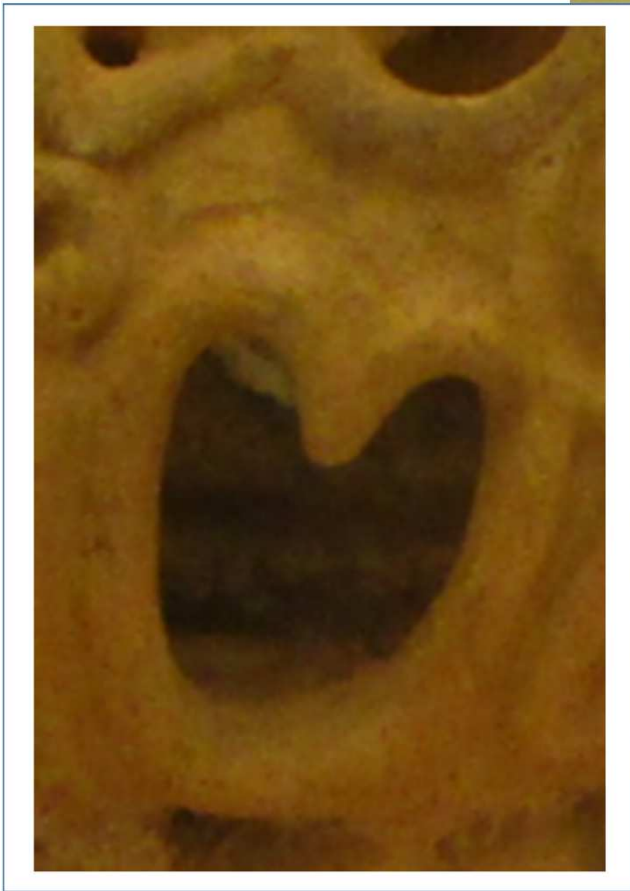
猪の目は、日本の古くより、
魔除けのシンボルに使われてきた。

近世では、武士の刀の鍔、社寺の棟木
の端や鈴に見られる。

更に、縄文土器にも、見ることができる。

(蛇、カエルは再生のシンボルであり、
イノシシは魔除けのシンボル)

火焰型土器の 猪の目



この猪の目、刀の鑿や
神社仏閣の鈴に見る
ことができ、古くから
魔除けのシンボル。

実は、縄文土器にも
あるのです。
縄文の昔から、
日本人の心にある
魔除けなのです。



猪の目は、主屋の鬼瓦
の下の「懸魚」(げぎょ)
にも、見られます。

「懸魚」とは、神社やお寺の
屋根が、切妻造りか入母屋
造りのとき、その破風板部分
に取り付けられる妻飾りのこと。
「懸魚」とは、文字通り「魚を
懸ける」ことで、水と関わりの
深い魚を屋根に懸けることで
「水をかける、火防」の意味に
通じているそうです。



4. 不動明王

5. 巨石、銘石

皆さん、ご存知のことですので、
今日は省略します。

6. まとめ ～ 祈りと感謝

おびただしい数の龍の意味
龍、鯉、鬼瓦、不動明王、巨石、
猪の目などの魔除け、守護神・・・

その狙いは

商売繁盛と一家の幸せ、
お客と近隣住民の安寧を祈る
パワースポットと思っています。

単純化すると...

薬種・薬師如来

十二神将

登り龍と下り龍

四方・八方の守護神

双龍

衆生の救済

四靈獣

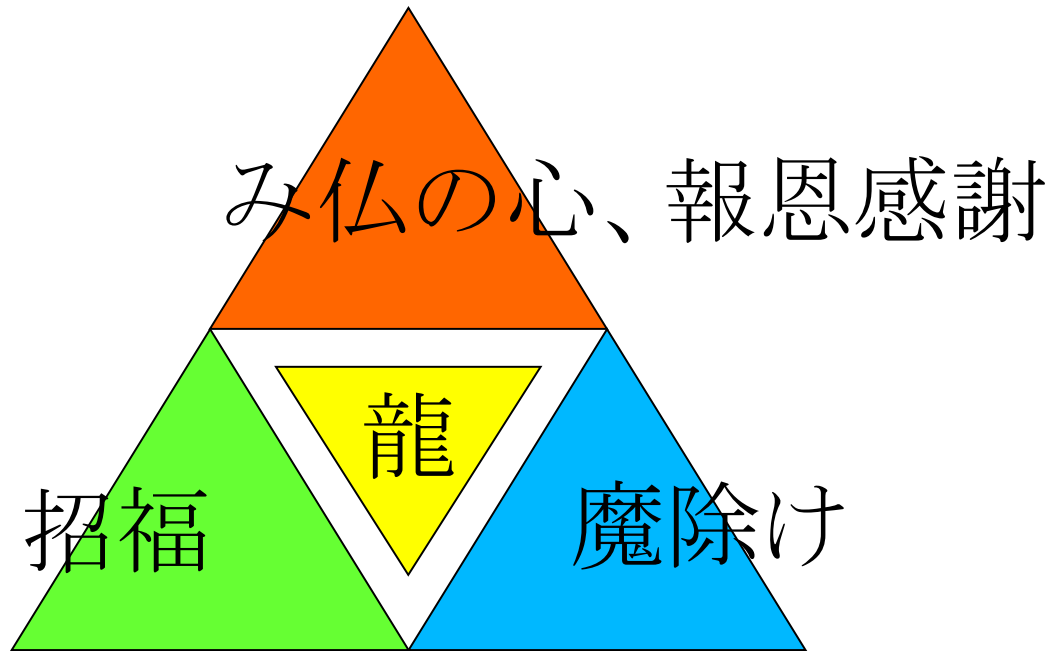
十二支

龍

招福・魔除け

人々の安寧、五穀豊穰、商売繁盛、子孫繁栄への祈り

守護神は、招福というより、魔除け。
～ サフラン酒のいろいろな装飾は、
下図に集約できるような気がしています。



その祈りと感謝が、仁太郎ワールド

最後に

仁太郎さんは、東洋思想、仏教思想に造詣の深い、希有の思想家だっただと思っています。一方、茶道もたしなむ趣味人でもありました。

鏝絵蔵の東面の絵柄の配置と、衣装蔵の鏝絵との関連、これしか、あり得ない「絶妙の配置」の話もいつか。

聞いていただき、ありがとうございました。